

迷信・呪術・魔術

——西欧近世の魔女言説から——

黒川 正剛

宗教という言葉・概念の再考が必要とされるなら、この言葉と併置あるいは対置されることがある迷信／俗信や呪術／魔術という言葉・概念の再考も必要だろう。近年、西洋世界の歴史学研究では、呪術 magic 概念の再考を主張する流れが見られ、そこでは迷信 superstition が度々関連概念として言及されている。また、魔女裁判を始めとする西洋の歴史的事象の中に見出される magic や witchcraft を、日本語を操る研究者が翻訳するとき、呪術／魔術のどちらで訳すか、困難をおぼえることが少なくない。本発表は、西欧近世の著名な魔女言説を手がかりに、言葉の問題にこだわりながら、「宗教と迷信」、「宗教と呪術／魔術」という問題、および翻訳可能性の問題を検討しようとするものである。

宗教学や民俗学の領域では、欧米語の superstition の訳語として適切なものは、主観的判断をとまなうとされる迷信ではなく、俗信だとされてきた。この判断は、日本の事象を扱う場合に行われるものだが、西洋の歴史的事象を扱う場合、この判断をそのまま適用することは難しい。なぜなら、現代の事例のように俗信が妥当な場合もあるが、古代を除く近代以前の事例の場合、superstition という名づけを行う主体はキリスト教であり、その名づけには、基準としてのキリスト教からの逸脱・超

過等の意味が含意されているため、翻訳する場合には、漢字語源的に、惑い・乱れ等の意味のある「迷」がふさわしいと考えられるからである。しかし、迷信が最適な訳語であると断言することも難しい。

西欧中世におけるキリスト教の発展と浸透の過程で、迷信は悪魔と呪術 magic に結びつけられた。十六世紀には宗教的大変動と大航海時代の幕開けにともなう異教世界との遭遇により、迷信への関心はそれ以前のどの時代にもまして高まった。十六世紀末、magic や witchcraft を百科事典的に論じていることで、魔女裁判研究史上、重要著作として知られる『魔術探究』がマルティン・デル・リオによって著された。原典書名表記は、magicus (羅) magique (仏) を使用しているが、同書では呪術が悪魔との関連性において捉えられているため、翻訳上、呪術は魔術に転換する。

同書の冒頭で論じられているのが迷信の問題である。デル・リオがラクタンティウスの言葉を引用しながら、宗教 Religio を真の崇拜 veri cultus、迷信 Superstitio を偽の崇拜 falsi cultus と対置するとき、語形表現の対称性から、迷信を「パラレル宗教」pararell religion と理解することが可能だが、翻訳上の表記が問題である。「宗教と迷信」という対置と漢字表記は、人口に膾炙しているが(井上円了)、迷信という言葉が「パラレルな宗教」を適切に表現しているとは言い難い。「宗教と迷信」に変えて、「正信と迷信」という表記も不可能ではないが、それでは宗教という言葉が脱落してしまい、pararell religion そのものが成立しない。このような翻訳困難性から、迷信を

第12部会

「パラレル宗教」と完全に読み換えて訳出・表記するとしても、それが学問的に有意義な解決策かどうか即断できない。

「漢字の意味表象性と宗教学」という問題は、些細な問題にも思える。しかし、漢字学者白川静の「わが国の文化は、漢字に支えられているところが多い。ことに知的な営みの世界から漢字を除くことは、ほとんど不可能といってよい。わが国の文化的集積の大部分が、その上に築かれているからである」(『字通』一九九六年)という言葉を考えるとき、あらためて、漢字という文字媒体の意味表象力を考える必要があると思われる。学術用語の概念規定の問題を探究する際、その学術用語を生み出した文化におけるその用語の語源的探究が行われることが多い。そうであるなら、不毛な作業に陥る危険性を認識しつつ、西洋の用語を輸入し、翻訳する側の言葉⇨漢字の解析作業も行う必要があるだろう。

Th・マン文学における「敬虔」の問題

掛川 富康

①ロマン主義以来、敬虔主義は、この新しい精神と接触し、一八世紀後半から前世紀の前半期に至るまで大きな精神的勢力であった。Fr・シュライエルマッハー、S・キルケゴール、Th・マン等の、神学者、思想家、文学者の内面を深く規定し、敬虔性とロマン主義的感情との相互浸透あるいは峻別が課題として

意識された。

②所謂ウィルヘルム時代に始まるマンの文学活動は、一般に「生と精神」の対立という側面から論じられるが、しかし、マン文学の後期に至るまでの展開を視野に入れると、この対立の問題は、上記の敬虔主義とロマン主義の相互交流という、より大きな潮流の内部に位置づけられる。「生と精神」の対立のモチーフは、マン個人がその文学活動の初期において対峙したテーマであるが、マン自らになかで変容し、生と芸術が同列化され、ともに「精神」に対立するという、構図と構想における転換が図られる(『フィオレンツァ』)。

③マンの世界観の形成に大きな影響力をもったのはA・ショーペンハウアー、R・ワグナーと並んで、とりわけFr・ニーチェである。マンのニーチェ受容は、その音楽性を基調としたデイオニソス受容、つまりソクラテス主義批判の受容と、その新しい倫理の構築のプログラムに対する拒否という、二つの相反する面を持つ。マンの前者の意味でのニーチェ受容は、文化の背後にある宗教的次元の把握、及びこの宗教的次元が「敬虔」という質をもった次元と結びつけられて理解されていくことを可能とする。

④作品分析―詩歌を中心としたドイツ文学の伝統に、長編のパロディという形式を用いて対決した『大公殿下』には、敬虔性が、「大公」と対比された民衆の意識として把握され、大戦中・後の大作『魔の山』は、舞台は一九一〇年代から第一次大戦勃発時までであるが、後期中世に由来し、二〇世紀前半までのドイツ市民社会の精神的基盤の批判的分析のロマンである。